

産院からのお知らせ

～ウガンダでの国際支援～母子保健事業～

# ウガンダでの国際支援 ～母子保健事業～

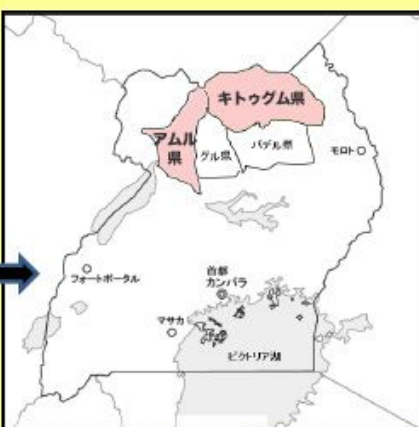
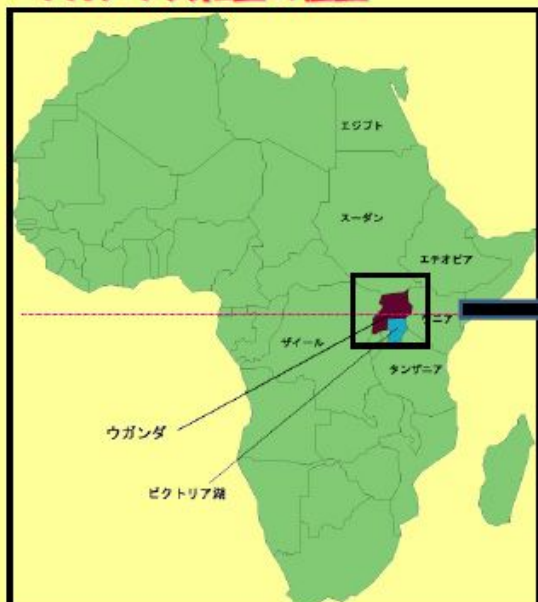
## ウガンダ母子保健事業とは！？

日本赤十字社はウガンダ赤十字社と協力し、ウガンダ共和国のとりわけ医療施設へのアクセスが難しく、衛生状況も劣悪な北部地域の母子保健の状況を改善するため、2010年1月から同国北部2県の妊産婦を対象に母子保健事業を開始しました。ウガンダ北部では、約7割の妊婦が伝統産婆や家族の介助のもと自宅で出産するため、衛生的とは言えない環境での出産を余儀なくされています。こうした状況を改善するために、出産時に必要な物品を詰めたバッグ(通称:ママバッグ)を妊婦に配付する活動や、安全な出産についての正しい知識の普及と妊産婦のケアを行う保健ボランティアの育成、保健医療施設への資器材整備などを行っています。



(ママバッグの中身)

## ウガンダ共和国の位置



## 当院助産師の活動報告

当院ではウガンダ母子保健事業に1名の助産師を派遣いたしました。今回はその活動の様子についてご紹介いたします。

こんにちは。葛飾赤十字産院助産師の平井香名です。本事業は2010年から2012年までの3年計画で、現在事業を開始して1年半が経ちました。ウガンダ赤十字社は、今年8月に今まで実施してきた活動の効果を確認するための中間評価を行いました。この中間評価を支援するために、母子保健専門家としてウガンダ母子保健事業に参加してきました。

事業を展開している視察のため、青い空の下、車を走らせ事業地に向かいます。整備されていないデコボコの赤土の道の両側には広大な緑が広がります。アフリカといったら砂漠のように緑が少ないイメージですが、緑の豊かさに驚きました。ウガンダが「アフリカの真珠」といわれるのも納得です。事業地を視察していると、子どもの多さにビックリします。ウガンダの平均出産人数はなんと7～8人です。少子化の日本とは大違いですね。ボロボロで破れた服を着ている子や、着る服さえもなく裸でいる子ども。その光景は人々の貧しさを物語ります。



(村の子どもたち)



(妊婦健診を待つ人たち)

支援をしている医療施設に入ると、妊婦健診を待つ多くの妊婦さんや、出産後の健診にきた母親や子どもたちに出会いました。座るところがなく、地面に座っていたり、または寝ている人たちも。医療施設で働く助産師によると、同事業が始まって以来、徐々に妊婦健診に来る妊婦さんと、医療施設でお産する産婦さんが増えたといえます。

これまでウガンダでは、出産妊娠に対する知識の低さや医療施設までの距離の問題など、様々な理由から自宅で出産する方が多く、妊婦さんやお子さんが命を落としていました。しかし、事業が始まり育成したボランティア達の活動により、徐々に妊娠出産に対する知識も向上し始め、より多くの人が医療施設を訪れるようになりました。

医療施設でママバッグを受け取り出産した母親からは「貧しくて、出産に必要な物は何も買えない。安全に医療施設で産めてとても嬉しいです。とても感謝しています。」と喜びの声も聞くことができました。しかし、まだまだ家での出産が安全だと間違った認識をしている方が多く、夫が医療施設に行くのに反対するなどの理由で、自宅分娩の数は未だに多いのが現状です。赤十字はこれからも改善策を検討し、より多くの女性と子どもの健康と安全を守るよう支援していきます。



(ママバッグをもらい出産をした母親)

## 院内写真展のお知らせ

ウガンダ母子保健事業での活動を終えて、無事帰国した平井香名助産師の活動写真を、院内ロビーに掲示しております。ウガンダ共和国の様子や、現地の人々との交流風景など様々な写真を掲示しておりますので、診察の待ち時間などに是非ご覧ください。

